村里国際スキー・スノーボード連盟副会長インタビュー

村里 敏彰 副会長

1951年岩手県盛岡生まれ、インスブルック大学、東京教育大学で体育学を学び、オーストリア連邦体育大学ウィーン校で国家検定体育教師修了。オーストリア国家検定スキー教師、同アルペンコーチ、1980年（株）スポーツユニティ設立、1993年盛岡・雫石アルペンスキー世界選手権大会スポーツディレクター、1998年長野オリンピック競技大会組織委員会Assスポーツディレクター、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会国際局長、全日本スキー連盟副会長を経て、現在国際スキー・スノーボード連盟副会長

本日は、スキー界きっての国際派で現在国際スキー・スノーボード連盟副会長をされている村里敏彰さんに、御自身のスキー半生や今後のスノースポーツ、スノーリゾートへの思いを語っていただきたいと思います。

村里さんは盛岡のご出身と承知していますが、ご両親もスキーをされていたのでしょうか？

父は盛岡で小児科医をしていましたが、両親ともスキーはしません。

それではスキーを始められたきっかけはいかがでしょうか

岩手県盛岡ですから、小学生の頃は多少はスキーをしていました。中学で東京に出てきました。駒場高校時代、東京の人にあまりなじみのないことをやりたいと思い、スキー同好会を作り、皆で夜行バスに乗り尾瀬などに行きました。

80~90年代のスキーブームの先を行っていますね。その後はいかがでしたか。

高校時代はちょうど大学紛争の頃で、漫然と医学部を目指すのもどうか、何かやりたいことをやってみたいという気持ちがありました。1968年にグルノーブルオリンピックがありスキー競技の報道を耳にし、図書館で偶然、杉山進さんのスキーの本を見かけ読んでみました。その中に岩動先生の紹介でオーストリアに渡ったと書かれていました。岩動先生は、科学技術庁長官もされた故岩動道行参議院議員の兄弟で、お付き合いはありませんが、親戚にあたる方でした。それが海外スキー留学に興味を持つようになったスタートだと思います。高校卒業後、岩動先生のつてでオーストリアに渡りました。1969年です。

いきなりオーストリアですか、すごい行動力ですね。言葉などどうされました？

皆が心配しましたが、3年は帰らないと啖呵を切って出かけました。父からは大学に入って体育の勉強をするというのであれば良いとの約束を得、渡墺しました。当時は外貨規制が非常に厳しく、仕送りもままならず、皿洗いや便所掃除等のアルバイトで暮らしていました。父との約束もあり最初は語学学校、その後は予備校に入り、大学の入学資格試験マトゥーラ、日本の大検でしょう、これを取得しインスブルック大学の体育学部に入りました。

スキーとの関りはいかがでしょうか？

大学ではスキー好きな学生たちと5人組の仲間ができ、体育運動学や方法論、スポーツ力学などを学びました。その後も彼らとは世界のスキー界で一緒に活動する機会が多くありました。在学中の1972年に札幌オリンピックが開かれ、オーストリアスキー教師の国家資格を取得していた杉山進さんがオーストリアチームに随行されましたが、スイスチームもドイツ語とスキーができる日本人を探しており、私が手伝って同行することになりました。日本を離れて3年目の帰国です。この時スイスチームは大健闘で、この時の私に通訳兼アシスタントを依頼したアルペン部長がその後札幌オリンピックから政治家に転身して大統領になりました。オリンピックをまじかで体験しそのエネルギーにカルチャーショックを受け、本格的にスキーにかかわってゆきたいと思うようになりました。ここからがスキー人生の始まりです。この時オーストリアは大不振で、インスブルック大学に戻るとオーストリアチームの総監督だったホピヒラー教授から、なぜスイスのアシスタントを引き受けたのと少し嫌味を言われましたがそのオーストリアチームとは近しい付き合いをするようになりました。
その後、スキージャーナル誌から「オリンピック選手のその後」の取材の依頼を受け、多くの著名なメダリストと知り合う機会を得ました。
また、1971年ドイツ・ガルミッシュ、1975年にチェコでインタースキーが開かれ、日本の基礎スキー界の方々と知り合うこともできました。
当時まだ学生でしたが、1976年のインスブルックオリンピックで元SAJ堤義明会長の通訳をしたことで知己を得て、翌年の富良野のワールドカップではワールドカップ村の「村長」を任され、1993年雫石世界選手権、1998年長野オリンピックの招致や運営活動に携わりました。これらの国際大会は堤会長の影響がなければ実現しなかったと思います。
話が前後しますが、富良野の「村長」をしたこと、また、1978年ころだったと思いますが、オーストリアが得意としていたワールドカップ滑降種目で勝てない時期がありました。マテリアルスーツが要因だと言われていました。当時カナダ、スイスがデサント社製スーツで圧勝していたこともありオーストリアチームから公式用品ではないデサントのスーツのテストを依頼されました。極秘のテストを経て採用され、その後オーストリアが復帰、勝ち始めたことから絆を深めることができました。また大学時代の仲間5人組がオーストリアチームの総監督やヘッドコーチなどに就任することになり、さらに、チームとの付き合いまた世界のトップレーサーやコーチたちとの交流も深まりました。

日本のスキー界との関りはいかがでしょうか？
テレビ番組でスキーを教えられていたようにも記憶していますが。

それは1980年頃からでしょう。私は20歳最年少でオーストリア国家検定教師資格を取得しましたが、日本での基礎、競技スキー歴もちろんありませんから帰国後は、SAJにもSIAにも入らず個人でスキービジネス活動をしていました。1970年代後半から、日本の子供たちに世界のスキーを知って、見てほしいという思いで、レーシングキャンプで子供たちをヨーロッパに連れて行ったり、世界のトップ有名選手を呼んで国内でレーシングキャンプを開いたりしていました。そのような世界のスキーをコーディネートする組織ということで1980年には（株）スポーツユニティを創りました。
日本でスキー活動をする前から、スキーのテクニックはもちろん理念というか文化としてのスキースポーツというか概念が世界と日本では異なっていたと思います。当時の日本のスキーではデモンストレーターが一番うまいと思っていたようで、どうして彼らがオリンピックに出ないのだろうというような感じすらありました（笑）。そこで、アメリカ・オレゴンでのスキーテストやレーシングキャンプに世界のトップ選手を招聘し媒体からもアピールしてきました。そこに日本のデモンストレーターもジョイントして世界のスキーを一緒に体験していく機会を創りました。
1989年に堤氏がSAJの会長に就任されたこともあり、1993年にSAJ理事に就くことになりました。2002年から2006年までは競技本部長も仰せつかりましたが、それまではスキービジネスに携わっていましたので、SAJのアマチュア理念の中で利益相反にならないよう相当に気を使いましたが専門性、エキスパート部門の必要性を感じていました。
スノースポーツ環境は「私をスキーに連れてって」に代表されるようにブームでした。長野オリンピックの頃が頂点でしたね。その後は下降傾向になり、スノースポーツを元気にするためには何をすべきかでずいぶん悩みました。広報活動に力を入れましたが、丸山さんと知り合ったのもこのころですね。Feel the Snow, Forza Nippon, I love snow などキャンペーン事業が懐かしいですね。
SAJ内のトラブルもあり、一旦2010年にSAJを離れ東京オリンピック組織委員会で招致そして組織委員会の国際局長としてに2022年まで携わることになりました。

日本のスポーツ界で世界のスポーツ界をリードする方々と交流のある方は
極めて少ないですね。村里さんは貴重な国際派だと思います。
ところで、話は変わりますが、スノースポーツ、スノーリゾートへ
望むものはいかがでしょうか？

一つ目は、世界を見てほしい、世界でプレゼンスを高めリーダーシップを発揮できるようになってほしいということです。そのため、前にも申しましたが、日本の子供たちを海外に派遣し、世界のトップレベルのスキーヤーを日本に招聘する、つまり世界的なイベント大会を開催し参加する、これらの活動を通して日本のスキーレベルを上げてゆきたいということです。
二つ目は、日本のスキー場は設備が古くてゲレンデ整備なども遅れていることです。利用者目線になっていないスキー場が多いです。地域が努力して世界に通用するスキーリゾートを目指してほしいです。日本のパウダースノーは世界のあこがれですが、それだけではなく、スキー場やそれを取り巻く地域の魅力が世界中のスキーヤーを引き付けるようになってほしいです。

そのためには、地域、自治体とスキー場が一体となる必要があると思います。スキー場とホテルしかないのではスキー文化は育ちません。町や村にスキー場がある、または、これはニュージーランドの例ですが、環境規制が厳しくてスキー場に宿が作れないので、町に泊まりスキー場にはバスで行きます。地域がスキー客の受け皿になっています。

岩尾専務）

村里さんのご指摘の通りだと思います。我々も骨董品とも揶揄されるリフト、ゴンドラの架け替えが進むよう様々な活動を進めています。
また、スキーヤーが外資系や大手のホテルに泊まりスキーを楽しんでそのまま帰ってしまうようでは地域が潤いません。街に出てアフタースキーを楽しむ、地域の文化や人との交流を楽しんでもらいたいです。そのためには地域が一体となって受け皿つくりをして行くことが大切で、観光庁も、スキーに限りませんが、観光による地域振興施策に力を入れています。

私は今、盛岡に住んでいます。岩手には、盛岡からすぐに行けるところにいくつものスキー場があり、雪質など素晴らしい所が多いです。雪が豊富な地域にも関わらず子供達のスキー授業がなくなりつつあります。妻も盛岡を中心とした子供達が雪に親しむスキーの圏域づくりに取り組んでいますが、岩手は人口が少ない、東京に近い信越や群馬と比べるとハンディが大きいです。コロナも収まり、花巻台湾間は週3便就航しています。オーストラリアは羽田、成田ですから盛岡には来にくいようです。それでも、新幹線に乗れば東京から2時間です。

岩尾専務）

先ほども申しましたが、観光庁はインバウンドが特定の地域に集中するのではなく、できるだけ多くの地域、できれば田舎に分散されることを望んでいます。地域的な広がりです。オーストラリアなどのインバウンドの方は長期滞在されますから、東京から2時間というのはハンディにはならないと思います。多言語対応等の受け皿作りが進めば盛岡を中心としたスノーリゾートは非常に魅力のあるものになると思います。観光庁の補助制度も活用できるのではないでしょうか。

今シーズンはようやく東京2020の業務も終えコロナ規制も緩和されたことから、国内外で100日ほどスキーを楽しんできました。日本で感じたことは、スキー場に関わる人がばらばらだということです。スキー場やスキースクールの経営者、スキー教師、パトロール、スキー場整備員等等それぞれがそれぞれの立場で、スキー場を良くするためにはどうしたらよいか考えていると思います。それが共有されていません。特に感じたのは安全確保です。カービングスキーになってマテリアルが良くなったことから、スキーヤーの能力以上のスピードが出てしまうということです。生徒とスラロームの練習をしているところに猛スピードで真っすぐに滑ってくる、危なくてしょうがありません。ヨーロッパやオーストラリアのスキーヤーに多いようです。日本のスキースクールでは安全面の指導もしていますが大事なことです。

スクール入校は義務ではないですから、
無謀な滑りをなくするためには別の手立てが必要ですね。

アメリカでは無謀なスキーヤーに対してはパトロールが注意し、それでも危険な時はリフト券を取り上げることもあります。ヨーロッパ、日本ではやっていない感じですね。スキー場のルールが分からないスキーヤーには安全滑走マナーを指導することも大事です。かつてはゲレンデの真ん中に座り込んでいるスノーボーダーも多く見受けられ大変危険でしたが、最近ではあまり見かけなくなりました。安全、スキー事故防止のため、コースの入口にできるだけ分かり易くコースの適性や難易度等を表示するだけではなく、コース案内や安全な滑り方の指導や無謀な滑走を防止するコンシェルジュのような人が必要かもしれませんね。

招致活動に携わって来られた東京オリンピック・パラリンピックも終わり、
また、北京オリンピック・パラリンピックでは日本選手が大活躍しました。
最後に一言お願いします。

東京オリンピック・パラリンピックでは、汚点を残すようなことが起きてしまったことは非常に残念です。北京オリンピック・パラリンピックでは素晴らしい成績を上げましたが、世界と比べると天才が勝利を収めた感が多く、全体的な強靭な層が薄いです。まだスキーが雪国文化として根付いていないように思います。スキーの授業が減っていることやスキー教室の時期が1月下旬から2月上旬に集中することの弊害などが気がかりです。降雪地域が雪国文化としてスキーに取り組み、世界に通用する人材を育ててほしいです。
SAJの副会長も退任しましたが、これからもスキーレッスン、コーチングは続けていきたいと思っています。スキーを通して世界中の素晴らしい方々と知り合うことができました。スキーは楽しい、このことをこれからも多くの方々に伝えてゆきたいです。

これからもスノースポーツ振興のため、国際人としてのご活躍を期待しております。
本日はありがとうございました。